

「生きる希望」親子で伝え

東日本
大震災
14年

映画では自著に記した震災自体を描くのではなく、「生きる希望」がテーマに据えられていることを踏まえて「被災者にも、これからを生きる子どもたちにも届けられる映画になった」と評した。

映画は2024年以降、30回もの自主上映会が各地の映画館や公共施設などで開かれた。2人が顔をそろえたり、個別に登場したりする上映後のトークイベントも10回以上開催し、映画を通じて震災伝承や防災発信に努めている。

教え子の死経験

映画「有り、触れた、未来」の原作者の斎藤孝男さんと、長女で出演者の舞木ひと美さん〓宮城県塩釜市で

自著原案の映画化 上映会で全国巡る

わたる避難所運営を指揮した。一方で、教え子の死や被災で心に傷を抱えた生徒たちと向き合う日々も過ごした。同校の校長として定年退職した後、震災時の経験を書き「生かされて生きる―震災を語り継ぐ―（河北選書）」にまとめ、18年に刊行した。

型コロナウィルス禍で社会に閉塞感（さいせいかん）が漂い、若者の自死が相次ぐ状況に心痛めていた時に本を読んだ。被災後も希望を抱き続けた若者の力強さに心打たれ、「生きる力」をテーマにした映画の製作を決意。舞木さんら若手の仲間とチームを作り、自主製作するための資金

できたかが描かれており、読んでもらえたら」と思い、父親の本を旧知の映画監督、山本透さん(56)に手渡した。その後、山本監督は新

命向き合う物語
映画は、斎藤さんの

を抱えた生徒たちと向き合う日々も過ぎた。同校の校長として定年退職した後、震災時の経験を著書「生かされて生きる―震災を語り継ぐ」(河北選書)にまとめ、18年に刊行した。

ひと美さんは「心に傷を負った子どもたちが大人たちとどう歩ん

況に心痛めていた時に本を読んだ。被災後も希望を抱き続けた若者の力強さに心打たれ、「生きる力」をテーマにした映画の製作を決意。舞木さんら若手の仲間とチームを作り、自主製作するため資金集めに奔走した。

テーマに共鳴した宮内ひとみさん(当時芸

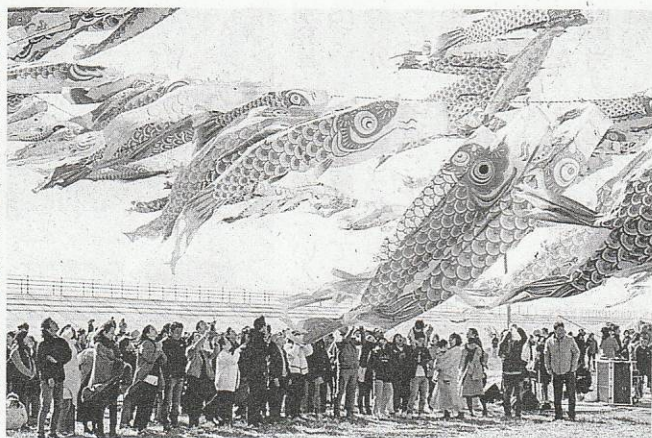
著書を原案としながら、山本監督がオリジナルの脚本を執筆。津波や震災を直接的に描く手法は避けた。突然の交通事故で恋人を失った主人公の女性と末期がんに侵された母、大災害で家族を亡くした父と子らが描かれ、命と向き合うそれぞれ物語が進行し、やがて交錯していく。

「防災」というと、『これをすべき』といった重くて硬いイメージがある。震災後、一生懸命生きてきた人たちの姿を通して人の強さ、生きる力を伝えることも一つの『防災』だと思う」と話す。

映画は自然災害への教訓にとどまらず、人々の支え合いや、つながりの尊さを問いかける。「映画は奇跡的な出会いと多くの善意によって生まれた」とひと美さんは振り返る。映画化の実現にあたって、被災者や遺族の出演協力を得られたことは、それを象徴している。

斎藤さんも「言葉で目の前の人に語り継ぐアナログと、映像によって遠い未来にも伝えるデジタル、防災にはその両方が必要。互いに支え合って伝えていきたい」と力を込める。

映画の製作チームは個人や団体による自主上映会の申し込みを受け付けている。申し込み先はunchain311@gmail.com。



映画「有り、触れた、未来」に登場する青いこの
ほり◎UNCHAI-N10+1